Essay In My Life

ワタシたちを取り囲むもの

～「環境」という日本語について～

シンキング・バーズ
日本語研究班

「環境」を生きる
「環境」に生かされる

ワタシたちが日本語研究と言える領域に足を踏み入れてから、10年が経過しました。東日本大震災が、一つの契機でした。この間の日本列島は、毎年のように自然災害に見舞われ、昨年からは、いつ終息するかも分からない「コロナ禍」が続いて、ウンザリするような毎日を過ごしています。そんな日々に、ワタシたち日本語研究班として何ができるのかと思った時、「環境」という日本語が浮かび上がりました。自然災害もウイルスの脅威も、人類を取り巻く「自然環境」がもたらしたものです。ここでは、その「環境」という日本語について考えてみます。

●「環境」の語彙をめぐって

日本語の「環境」という用語は、英語の“environment”の翻訳語として、20世紀初め頃から使われるようになったとされています。「環境」という熟語自体は、中国古来の漢語とされていますが、文字通り「環（ワ＝環状の連なり）の境（サカイ＝目印）」のような、何となく内側と外側がある山手線みたいなニュアンスだったのかもしれません。その「環境」を“environment”に対応させたのは、日本人ということになっているようです。

“environment”という英語は、比較的新しい用語で、社会学者の早田宰氏によると、19世紀のイギリスで造語されたそうです。元になったのは、ドイツ語の“Umgenbung”とフランス語の“environ”とのことで、ドイツ語の意味をフランス語からの借用語でまかない、“ment”をつけたとのことです。

そこで、早速ワタシは、ドイツ語辞書とフランス語辞書を引いて、二つの単語を調べました。

まず“Umgenbung”は、「周辺の地域」「まわりの人々」などと訳されている女性名詞でした。動詞形に“Umgenben”があり、「まわりを囲む」「取り巻く」と訳されています。“um～”は「まわり」を意味する接頭辞なので、“um（まわりが）＋genben（与える）”かもしれません。“Umgenben”の由来は、ラテン語の“circum-dāre”を翻訳借用したとありました。手元のラテン語辞書にその単語はありませんが、“circum”が「円形状＝circle」を指すことくらいは分かります。「取り巻く」「包囲する」を意味する“circumdō”という単語がありました。そんな訳で、“Umgenbung”は、女性目線で包囲された感じを与える取り巻き（城壁？）のようなイメージが湧いて来ました。

一方、フランス語の“environ”は、「近郊」「郊外」という意味です。ただし、「およそ（about）」という意味があるので、この「近郊」は、距離感だけではない「ざっ

くり」というニュアンスなのでしょう。その「ざっくり」は、「en～」が「中に」という接頭辞なので、“en（中の）＋viron（周辺）≒around”なのかもしれません。“viron”は、たぶんラテン語の“gyrus（円／輪）”に由来するそうで、中から見た「ほぼ円形」という意味で、「その辺」になるのでしょうか。でも、ワタシのラテン語辞書には、「緑色」「新緑」を意味する“viror”という単語がありました。“en（中の）＋viror（新緑）”と考えると、ぼんやりとしたイメージが何となく湧いて来ないでもありません。

ここまではワタシの勝手なイメージなので、言語学的に正しいという保証はありません。でも、そのイメージは、これから述べる日本語の「環境」を考える上で、大きな指針になってくれると思います。

●「自然環境」と「社会環境」

日本語の「環境」は、使われ始めた頃は、ヒトを取り巻く自然の状態などを指すイメージだったと考えられます。主に自然的な外部のことで、花鳥風月のような優雅なものばかりではないことは確かです。ただ、現在の「環境」は、当初では想像できなかった事象まで表す肥満用語になっていると、ワタシは思います。意味が変わったというより、あれこれと食べすぎなのです。

ワタシたちは「環境」を、大きく分けて二つの領域に分類しています。それは、「自然環境（natural environment）」と「社会環境（social environment）」です。

「自然環境」は、言うまでもなく、人々を取り囲んでいる「自然」のことを指しています。もちろんその「自然」は、常に変化していて、人類の活動が影響している変化を含んでいます。その「自然」とは、大きな枠組みで地球的な「自然」を指すのが一般的です。大気（気候、大気圏物質など）、水（海洋、河川など）、陸（地殻、土壌など）のような基本的に非生物的な「自然」があり、その上で、生態系と言われるような生物的な「自然」があります。文化環境学の石上文正氏によると、“environment”はこの「環境」のことらしく、ヒトに影響する「自然」の状態や変化を指すみたいです。

それに対して「社会環境」は、ヒトが築いているシステム（法制度、モラル、習慣など）やヒトが使っている生活用品（食糧、インフラ、機械装置など）、ライフサイクルの中のヒト（家庭、仕事、教育など）のような、ヒト同士の繋がりが生み出したモノやコトを指しています。ある個人から見れば、ヒトはそういうモノやコトに囲まれて生きていて、その影響を受けて成長したり、生き方を決めたりしています。この「環境」は、石上氏によると日本固有らしく、外国では通用しないかもしれません。

この二つの「環境」は、ヒトの取り巻きという意味では区別する必要がないのかもしれません。でも、それぞれの「環境」は、問題を抱えていることは事実です。逆に言えば、問題を抱えているからこそ、「環境」ということばが盛んに使われるのです。

●日本人にとっての「環境」

一般的にワタシたち日本人は、「良い環境」を「暮らしやすい環境」と理解しています。「暮らしやすい」とは、「便利」「安心」「高級」「快適」のようなニュアンスです。もちろんそこには個人差があり、近くて便利な都心の生活環境が、すべてのヒトにとって「良い環境」とは限りません。また、いわゆる環境問題にとって、その生活環境が適正か、生活スタイルが妥当かは、別問題です。

逆に「悪い環境」という時、ワタシたち

日本人は、何をイメージするでしょうか。「不便」「物騒」「不潔」のようなイメージを持つかもしれません。でも、自然災害でひどい目にあった時、物理的には「悪い」生活環境になりますが、人々が助け合って生きる姿を指して、「悪い」と言うとすれば、それはちがうはずです。あるいは、隣近所が不仲なばかりに、高級住宅地と言われているのに暮らしづらいとなると、「悪い環境」になるかもしれません。

何を言いたいのかと言えば、ワタシたち日本人にとって「良い環境」「悪い環境」は、ものすごく主観的だということです。もちろん主観を否定するつもりはありませんし、「環境＝Umgenbung」の原義も、その程度のニュアンスだと思います。でも、昨今の「環境」には、主観とは異なる意味が求められています。例えば「コロナ禍」は、「自然」がもたらした「社会環境」の変化です。その「環境」変化は、日々更新されるデータで良否が判断されるので、主観を超えたものです。その主観超え「環境」は、いわゆる環境問題でも同じことになります。

●「環境」に向き合う気持ち

ワタシたちが日々を生きて行く上で最も重要な「環境」は、言うまでもなく生活環境です。日本語では主に「社会環境」のことを指していて、気候風土のような「自然環境」は、二の次とまでは言わないまでも、日々重要視しているとは限りません。業務上で「自然環境」を重視することはあり得ますが、それも社会的営みの内側での話です。

先ほど述べた主観を超えた「環境」というのは、個々の生活環境が共有している「公共的（public）環境」を指しています。そこで起こっている問題が重要視される時代になっていて、「自然環境」ならば、温暖化や海洋汚染、自然災害の多発、森林伐採や乱獲による生態系の変化などが挙げられるのは、ご承知の通りです。「社会環境」ならば、日本の場合は少子高齢化や都市部への人口集中、デジタル端末の普及に伴う社会変化、経済格差や孤独・孤立の広がりなどが挙げられ、世界的には、宗教対立や社会の分断のような傾向が見られます。

「環境」という日本語は、とても便利なことばです。でも、「自然環境」と「社会環境」や主観と客観が入り混じった状態で使われていて、使い方が難しい用語の一つになっています。公共的な「環境」はピンと来ないのに、私的な「環境」には敏感になるといった、とても「ざっくり」した認識差があるのです。温暖化と言われても個人レベルで何をすれば良いのか分からない、なのに、街にクマやイノシシが出没したとなると、大騒ぎになってしまいます。

「コロナ禍」はワタシたちに、「環境」について考える機会を与えています。公衆衛生という観点で考えた時、この感染症は、衛生環境が悪いから広がった訳ではありません。従来基準の衛生環境でも広がり、社会的モラルまで変えてしまいました。その変化したモラルが、今の「社会環境」をつくっています。その「社会環境」は、誰もが改善されることを望んでいるとはいえ、その日本語が表す意味は、残念ながらとても「ざっくり」したものです。

「環境」のイメージを、仮に城壁の内側から見た外側周辺としたら、その周辺には、多様なモノやコトがあります。動植物を含むさまざまな自然、道、畑、そして、集落があるかもしれません。その多様性を「ざっくり」表現しているのが「環境」と考えると、その良し悪しはたぶん、主観では決められないと思います。

（2021 年 4 月 5 日）

【出典及び参考文献】
・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』(1977 年、研究社)
・国松孝二編『独和大辞典』(1990 年 1 月、小学館)
・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』(1989 年、旺文社)
・Wiktionnaire “viron” https://fr.wiktionary.org/wiki/viron#fro
・水谷智洋編『改訂版　羅和辞典』(2009 年 3 月、研究社)
・国立天文台編『環境年表 平成 29 - 30 年』(2017 年 1 月、丸善出版)
・石上文正著「「環境」の定義について」(2011 年 2 月、『人間と環境　電子版 1 巻』、人間環境大学)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/uheoka/1/0/1_KJ00007991699/_pdf/-char/ja
・早田宰著「日本における用語「環境」の導入過程」(2003 年 3 月、『早稲田社会科学総合研究　第 3 巻第 3 号』)
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=15526&item_no=1&page_id=13&block_id=21

シンキング・バーズ新書

ボクとワタシの日本語診断
ワタシたちを取り囲むもの

2021 年 4 月 5 日（初版）発行

著　者 ： シンキング・バーズ
日本語研究班
発行者 ： 遊佐　芳泰
発行所：**シンキング・バーズ**
〒021－0821
岩手県一関市三関字神田１０５番５号
電話／ＦＡＸ　0191－23－0724
※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バーズに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。